

『エリザベス・ヘンダーソン、ロビン・ヴァン・エン著、山本きよ子訳
CSA 地域支援型農業の可能性』

『アメリカ版地産地消の成果』

国際領域 研究員 大山 利男

本書は、米国における「CSAのバイブル」としてよく知られる『シェアリング・ザ・ハーベスト』の邦訳である。初版は1999年の発行であるが、本書は2007年改訂版（Sharing the Harvest: A Citizen's Guide to Community Supported Agriculture）を翻訳したものである。

CSA（Community Supported Agriculture）は、すでに日本でもしばしば紹介されており、平成14年度『農業白書』のコラムでも紹介されたことがある。日本で言うところの、農業者と消費者が共同で取り組む「産消提携」や「地産地消」のイ

メージにちょうど重なる。ただし、共通するところもあれば、共通しないところもある。いずれも多種多様な取組だからである。本書は、そのCSAの多くの事例にふれた情報の宝庫であり、米国内の実態と展開状況を知らうえでまさに決定版となっている。

CSAは、ごく形式的にみれば、有機農法やバイオダイナミック農法に取り組む農場が、そこで生産した生産物を地元消費者に直接供給し、消費者はそれを消費するということである。このような取組は、ときに流通チャンネルやマーケティングの問題としてとりあげられるが、著者は生産者と消費者との積極的な関わりとその関係性を重視しており、そこにCSAの特質があることを強調する。たしかに直接販売ということであれば、ファーマーズ・マーケットやファーム・スタンド（農場直売所）も同様である。そちらの方がむしろ一般的かもしれない。しかし、

それらは不特定の消費者を相手に販売するものであり、それに対してCSAは、特定の生産者と消費者が結びつき、その関係に基づいて生産され、供給されるものである。生産物の供給量や品目、価格、運送・分配方法等をあらかじめ合意し、消費者は栽培シーズンのはじめに代金を前払いしなければならない。この事前契約の単位は「シェア」と呼ばれ、一株とか一口といった意味であるが、生産者と消費者の「分かち合い」というニュアンスが色濃い。原著タイトルのとおり「収穫の分かち合い」である。程度に差はあるが、農場経営と作柄の豊凶リスクの分かち合いをも含意する。実際、農場と消費者とのより強い結びつきを求めるCSAでは、農場経営（作付計画等）の意思決定や農作業等への協力にも積極的である。

少し視点を変えると、CSAは農業者と消費者のパートナーシップに基づいたオルタナティブな農場経営

モデルの試みでもある。消費者グループによる共同農場と言えるような取組もある。そのような場合、新規の農地確保や経営資金の調達、農業技術の習得等といった課題も浮上する。まさに試行錯誤である。こういった試行錯誤のコストと利益を分かち合おうとする人たちの「コミュニティ」がそこにはある。

現在、米国で農学系の学部をもつ大学（とくにランドグラント大学と呼ばれる大学）は、その多くがローカル・フードシステムのカリキュラムを開講している。さらにその付属農場や普及組織では「CSAプロジェクト」に取り組むところが少なくない。地元市民への地産地消の実践と普及啓発の推進役を果たしているのである。市民レベルではもちろん、大学教育や農業普及においてもローカル・フードシステムの重要性、CSAへの期待の高いことがうかがえる。

家の光協会、2008年2月
原著はElizabeth Henderson and Robyn Van En, 2007. Sharing the Harvest: A Citizen's Guide to Community Supported Agriculture. Chelsea Green Publishing Company.



そちらの方がむしろ一般的かもしれない。しかし、

基づいたオルタナティブな農場経営